オレはメイドだ

冷えピタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレはメイドだ

【Nコード】

N3472BA

【作者名】

冷えピタ

【あらすじ】

日本に存在する法律の効かない無法地帯 禁止区域で生まれ、赤ん坊の頃に母親を目の前で殺された少女。

少女は運良くある男に拾われ、禁止区域で生きるための術を身に付けていく。

そして卓越した身体能力と身に付けた戦闘技術によって、少女は奪われる側から奪う側へと進化していった。

そして現在 血に濡れた少女は、なぜか二階堂の屋敷でメイドをやっていた。

若干チート？原作崩壊もあるよ！原作ファンの方は十分に注意した上で読んでください。

01 オレはメイドだ(前書き)

連載一つ抱えてるのになにやってんだー！

ごめんなさい、気分転換です。

こっちは気が向いたら更新って形ですので、
気長にお待ちください
ね

01 オレはメイドだ

オレが生まれて最初に目にしたのは、血の海に沈む母親らしき人間の成れの果てだった。

赤ん坊の頃の記憶だが、この歳になっても消え去ることは無く脳裏に焼き付いて離れない。

父親は居なかった。母とオレを残して姿を消したのか、それとも死んだのかは定かではない。

偶然その場を通りかかった男に拾われて、命を救われた。つくづく思うのだが、オレは本当に運がいい。

オレが育ったその場所は、社会の常識が通用しない無法者たちの巢窟。

弱者であれば男は鬪り殺しにされ、女子供は犯される。強者こそが正義。強者こそが全て。

そんな世界で生きてきて、五体満足で今この時を生きている。なんともまあ運がいいとは思わないだろうか。

度重なる幸運 オレは運によって生かされているといっても過言ではない。

赤ん坊の頃に男に救われ、生きる術を教わることが出来た幸運。

男から課せられた生きる術という名の訓練は、決して楽なことではなかった。流石に死ぬ、と本気で覚悟したことも一度や二度ではなかった。

けれどその訓練によってオレは奪われる存在から、奪う存在へと進

化した。

まだ10歳にも満たない子供が、成人をとっくに迎えた大人たちを蹂躪する。

それ自体必ずしも珍しいことではない。大人だろうが子供だろうが、そこに関係するのは歳の差ではなく力量の差。

そして幸か不幸か、その場所でオレ自身よりも強い敵に出会うことがなかった幸運。

……いや、後者だけは少し違うか。一度だけ、オレより強い人間に出会った。

まだ子供の頃の話になるが、それでもオレに敵う者は育ての親である男以外には存在しなくなっていた。

十分な食事など得ることは難しいその場所で生きるには、他者から奪うことが基本だ。

殺すことを躊躇ってはいけない。もし見逃せば、食糧を奪われたことでオレに恨みを持って仕返しをしに来る可能性もある。

明日は我が身　　決してそれを忘れるな、と常々教えられていた。

けれどオレはそのことを余り重要視することはなかった。当たり前だ。オレに敵うやつなど居ないと思っていたから。

例え仕返しに来たとしても、また踏みにはじればいい。何人もの仲間を連れてこようが同じこと。

10人や20人が相手だったとしても、決して負けるとは思っていない。

それだけの自信があったのだ。

有頂天になっていたのだろうか。自分こそが他者を踏みにじることが出来る唯一の存在だと、慢心していたのだろうか。

そんなオレを、死神が断罪しに来た。

あの時は本当に死を覚悟したものだ。この世に生を受けてからというもの、一度も感じたことのないほどの圧倒的な死の気配。

オレという存在が、道端でもかく羽虫のようなちっぽけなものに見えてしまうほどの力の差。

足は無様に震え、呼吸が乱れた。心臓がビートを刻み、比喻でもなくてもなく本当に破裂してしまうのではないかとさえ思えた。

知らず知らずのうちに瞳からは涙が零れだし、オレの口はひとりでに命乞いの言葉を発していた。

『ごめん、なさい　　たすけてください。たすけて、たすけてください…!』

震えるオレを無言で見下ろす男は、身長が190センチにも届こうかという巨漢。

鍛え抜かれたその体には筋肉が鎧となり、大人が大勢で襲いかかるうがびくとも動かないであろうことが想像できた。

こいつを殺すには銃が一丁あっても勝てはしない。どうしても殺したいのなら、それこそ軍隊でも呼んでこないといけないだろう。

けれどオレには、軍隊から放たれる無数の銃弾の嵐の中にあってもなお、この男が倒れると言うイメージが湧くことはなかった。

不死身……そう言うにはあまりにもオカルトじみているかもしれない。どれだけ強かろうと一個の人間である。

先ほどの自分の言葉を否定することになるが、実際は拳銃一つで事足りるだろう。

けれど男から放たれる威圧感が、それを肯定させない。

死なない。殺せない。無言で佇む男から、そんな感情が伝わってきた気がする。

彫りの深い顔から覗く、肉食獣のように鋭い二つの眼から放たれる刺すような視線が、幼い頃のオレには死刑宣告のようにも思われた。

『……………去れ』

男は短く、それだけを告げた。

どうして見逃してくれるのか、そんなことは分からなかった。

捕まり、身ぐるみを剥かれた拳銃、殺される。それがここでの常識だったからだ。

けれどその疑問を解消しようとは思わなかった。

ただただ命が助かったことだけを喜び、オレは一目散に暗がりへと姿を消した。

それからその男とは一度も会っていない。それは喜ばしいことである。

もし再び出会うようなことがあったなら、今度こそオレの命運は尽

きていただろうから。

そして今オレが生きている、この日常と出会うことも無かっただろう。

静かに瞼を開く。

天井に備え付けられた明かりが目に入る。

ふと視線を窓の外にやれば、もう太陽が顔を出していた。

「やばい……寝過ごしたな。またツキから小言を言われる」

時間に遅れているという自覚はあるが、決して急ごうとはしない。ゆっくりと起き上がり、部屋の隅にあるクローゼットからオレの仕事服を取り出す。

慣れた手つきで寝間着から着替え、鏡の前に立った。

そこには、なんとも眠た気な表情でこちらを見つめる、メイド服に身を包んだ黒髪の美少女の姿があった。

オレの動きに合わせて、鏡の中の少女も動く。

「ふむ。今日も美少女だなオレは」

なんて馬鹿なことを言いつつ、意識の外へと押しやっていた部屋のドアの叩く音へと目を向ける。

「いつまで寝てるか。とっくに朝食の準備は終わってる」

「悪いな、今起きたところだ」

ガチャ、とドアノブを回すと、そこに居たのはオレより小柄な少女の姿。

オレと同じメイド服に身を包んだ少女の名前はツキ。オレよりずっと早くこの屋敷に仕えているメイドだ。

だがオレなんかのような一介のメイドとは違い、ツキはメイド長という胸にPADでも詰めてそうな役職がある。

「……どこ見てるか、桜」

「いや、今日もツキはちっばいだなと思って」

「ちっばいどころか、まな板の桜に言われたくない」

「オレって着やせするタイプなんだよ」

「一緒にお風呂に入った時のこと覚えてる」

「……さあ、はやく行こうぜ。飯が冷めちゃまずくなるだろ」

都合の悪い話題を出され、そそくさと食堂の方へと立ち去ろうとするオレをツキが呼び止める。

「何言ってるか。今はお嬢様たちがお食事中。私たち使用人は後」

「ええー、腹減ってるんだよ。それに麗華から一緒に食ってもいいって許可出てるだろ」

「旦那様が見たらお怒りになる」

麗華、とはこの屋敷に住むお嬢様の名前だ。

二階堂 麗華。日本でも有名な資産家、二階堂家の長女。

なかなかキツイ性格をしているが、逆にそこが気に入っている。思ったことを何でもズバズバと言ってくるあの態度は、他のお嬢様にはなかなか見られないタイプだ。

麗華の妹に、彩というお嬢様がいる。

ちっばいツキにも勝てないほどの貧乳な麗華と違い、こっちは爆弾を胸に抱えている。

恐らく爆弾の中央にある小さなボタンを押せば、この屋敷が吹き飛ばに違いない。

むしろオレの首が飛ばされることになるだろう。

そしてツキが口にした旦那様とは、麗華の父親でこの屋敷の主人である二階堂源蔵のことだ。

娘想いな良い父親であるが、オレが言うのもなんだが不器用な男だ。周囲に対して高圧的な態度を取っていることもあり、屋敷の使用人

たちからも恐れられている。

まさに屋敷に住まう大魔王である。

不真面目なオレをオッサンは心底嫌っているらしく、いつも小言を言われる。

まあ不真面目なのは自覚しているし、理解できない話でもないが。

その後、無視して食堂に行こうとしたオレの首根っこをツキに捕まえられて、ずるずると使用人室に引っ張られていった。

結局朝飯にありつけたのは、麗華と彩が食事を終えた一時間後だった。

使用人たちが集まって朝食を楽しむ。

だが、オレとツキの二人が座っているテーブルの周りには他のメイドの姿はない。

オレたちからかなり離れたところで、他のメイドたちが固まって食事を取っていた。

「……あの、桜」

「なんだ？」

「私のことは気にせずに、みんなとご飯食べてもいい」

「あ？ 別にオレはあいつらと群れて食べようなんて欠片も思っ
ねーよ。ツキと食べてたほうが百倍マシだ」

申し訳なさそうなツキの言葉を聞きながら、さして気にした素振り
もなくスープをスプーンで口に運ぶ。

……う、カボチャのスープか。オレ、カボチャ嫌いなんだけどな。

「物好きやね」

「言ってる」

ニヤリ、と笑みを浮かべるツキ。

まったく、こいつも不器用な性格をしてやがる。

心の底では誰よりも寂しがっているくせに、つまらない意地を張っ
ているんだろう。

オレがこの屋敷に初めて来た時も、ツキは一人で飯を食っていた。
それを他のメイドは心配する素振りもなく、むしろいい気味だと言
わんばかりの嘲笑の笑みを浮かべていたのを覚えている。

俺はそれが気に食わなかった。見ず知らずの少女の現状に対して、
どういう訳かは分からんが、とにかく気に食わなかったのだ。

それからというもの、オレはツキに積極的に話しかけるようになった。
た。

最初はどこかよそよそしい態度だったツキも、日が経つにつれてだ
んだんと心を開いていった。

あまり接点の無かった麗華や彩とも、ツキと親しそうに話をしている俺に興味を持ってあちらから話かけてきた。

そして今日は俺が働き始めて丁度半年。それと同時に麗華が通う学園の始業式……つまりボディーガードが決定する日だ。

資産家が多いこの町では、ボディーガードを育成する学園が存在する。

成長が著しい十代の頃から、ボディーガードとしてのノウハウを叩きこもうということらしい。

ボディーガード訓練生が二年生になると、同じ学園に通う資産家の令嬢を守ることになる。

ボディーガード訓練生の実力に合わせて、危険度が高いお嬢様に割り当てられていく。

ここで言う危険度とは、お嬢様自身のことではない。いや、麗華なら危険度は高そうだが、そうではない。

資産家の娘であるお嬢様には様々な危険が付きまとう。誘拐や暗殺……その他諸々。

特に麗華などは学園に通うお嬢様の中でもかなりトップレベルの資産家の娘だ。相応の実力者があてがわれることになるだろう。

「でも、大丈夫かよ？」

「……いきなり何言い出すか。ちゃんと目的語を言う」

「いや、訓練生とはいえ、ボディーガードを麗華が自分の傍に置くと思うか？」

「それは」

ツギが苦々しそうな表情をする。

麗華は超が付くほどのボディーガード嫌いだ。

オッサンが用意したプロのボディーガードたちも、麗華の我が儘で一週間と待たずに辞めさせられている。

麗華が言うには、パーソナル……なんだっけか。とにかく、パーソナルなんかがつんちゃらかんちゃらで、見知らぬ人間が傍に居ることが我慢できないらしい。

休日に外出する時にはオレとツギの二人が付き添っているが、ボディーガードの訓練など受けていないオレと、そもそも一般人であるツギには護衛など務まるはずもなく。

学園への登校に至っては、麗華は完全に一人だ。

彩は車で送迎されているが、麗華は歩くのが好きなので徒歩で登校している。

日本で最も犯罪数の少ない町であることには違いないのだが、あまりにも不用心である。

「とにかく、麗華お嬢様が納得の出来る人物が現れてくれるのを待つだけ」

「それしかないよなあ。でも麗華が納得できるボディガードなんて、この世に存在すんのか？」

ボディガードとは概して堅物が多い。

与えられた任務を私情を挟まずに遂行し、常に礼儀正しく、常に謙虚に……。

うん、無理だな。

そういうのは、麗華が一番嫌いとする人種だ。

これまで雇ったプロのボディガードも、みんなそういうタイプだった。

それに反したボディガードなど居るはずもない。もし居たとしても、オッサンが認めるはずもない。

彩もあれでいて人見知りをするタイプだから、見ず知らずの人物と一日中生活を共にするのはかなり厳しいだろう。

すっ、と開いていた窓から、小さく風が吹き込んできた。それがオレの前髪を小さく揺らした。

「なんか……面白くなりそうな予感がする」

くくつ、と喉を鳴らす。

そんなオレを見て、ツキが若干後ろに引く。

「電波受信？」

「ちげーよ！」

「やっぱり、桜がとある組織から送り込まれてきたスパイという説は当たってたか」

「なにその説、初耳なんだけど」

「私が作りました、えっへん」

「お前、電波でも受信してるのか？」

「凹む」

屋敷に吹いた小さな風。

それがどんな変化を屋敷にもたらすのか……

どちらにせよ、騒がしくなることは間違いないか。

そのせいでオッサンの機嫌がより一層悪くなることも、間違いではないだろう。

「夜な夜な桜が誰か宛にメールを送っているのも、その組織への情

報提供……！？」

「まだやってたのか、お前」

02 海斗はボディーガードだ

屋敷の二階の廊下をせっせと箒で掃く。
隅々までしつかりと、だ。手を抜けば後で皺寄せが来ることは分かっている。

「お、ラッキー」

廊下に落ちていた500円玉を拾い上げる。
誰の物かは知らないが、オレが見つけてオレが拾った物だ。つまりこの500円玉は俺の所有物ということになる。
普段から小銭を拾うことは珍しくない。
外出した時には財布を拾うこともある。その場合は流石に中身を確認して、持ち主の情報がないか確かめたりしているが。
まさに幸運様々である。

「……………ん？」

ふと窓から庭の様子を見ると、麗華が佐竹と見知らぬ青年を連れて歩いてくるのが見えた。

佐竹とは、ボディーガード訓練学校の校長である。
大柄な体格にスキンヘッド、それにいつもサングラスをかけており、どこぞのヤクザの親分といった風貌だ。

それにしても、あの男はこの誰なんだろう。
屋敷に一度でも足を運んだ人物の顔は完全に覚えている。が、その男の顔は俺の記憶の中にはヒットしなかった。

真実を確かめる為、筥を廊下を立て掛けて、一階へと歩を進めた。

「あ、桜……」

「よう」

食堂の扉の前に立っていたツキに声を掛ける。

「大変。麗華お嬢様が自分からボディーガードを連れてきた」

「へえ〜………つてマジで!？」

それは一大事だ。明日は雪どころか流星群が降ってもおかしくはない。

あのボディーガード嫌いの麗華が……。

先ほど見た男が、そのボディーガードなのだろうか。

しばらくすると、食堂の中から何やら言い争うような声が聞こえてきた。

「少し行ってくる」

「え………ちょ、ちよっと待つ!」

ツキの静止の声を振り切り、オレは食堂へと足を踏み入れた。

食堂の中に入ると、麗華と先ほどの青年の視線がオレに向けられる。

「あら、桜。もう起きてたの？」

「いやいや、もう昼だから。お前の中でのオレはどんだけお寝坊さんなんだコラ」

心底意外だと言わんばかりの表情で尋ねてくる麗華に、少々メンチを切りながら話す。

オッサンに見つかれば一発で首の状況だろうが、食堂の周りに人間の気配はツキのものしかない。

「主人にタメ口で話すメイドなんて聞いたことねーぞ」

先ほどまでオレの行動を伺っていた青年が、呆れた様子で口を開く。

「あ？ここに居るだろうが。統計学的な数値だけで全てを測れると思うなよ」

メイド服のスカートの中から取り出した拳銃をちらつかせる。

「おい、なんでメイドがそんな物騒な物持ってたんだよ」

……ほう。普通の人間なら拳銃を見て怖がりそうなものだが、この青年の表情から恐れという感情は読み取れない。

むしろ普段は滅多にお目に掛かれないだろう生の拳銃を見て、興味津々といった様子だ。

「桜はちょっと特別なの。あんたがいちいち気にするようなことじゃないわ」

普段からオレが拳銃やナイフなどを持ち歩いていることを知っている麗華は、さして気にした素振りも見せずにいる。

最初に見られた時は一悶着あったものの、慣れとは怖いものである。

「はあん」

麗華を横目で見つっ、青年は生返事を返す。

納得した、というよりもむしろ、どうでもいい、と言った感じだ。

「あなたにも紹介しておくわね。この子はうちでメイドをしてきている桜よ」

それで桜、こつちのアホ面しているこいつは朝霧海斗。今日から私のボディーガードになる男よ」

「おい待て、俺はお前のボディーガードになるなんて納得した覚えはないぞ」

朝霧海斗と呼ばれた青年……人を苗字で呼ぶことなどめったにないので、海斗と呼ぶことにする。

海斗はうんざりとした様子で、食堂のテーブルの上に足を投げ出した。

「桜」

「あいあい」

麗華から目配せされたオレは、一瞬で海斗の背後に詰め寄って後頭部に銃口を突き立てる。

「なんの真似だ、これは」

「生憎、お前にボディーガードになってもらわなければ、オレの休日　もとい、麗華の身に危険が及んだ時に傍にいてくれる人間が居なくなる」

「今思いつきり本音が出てなかったか？」

「気のせいだ」

カチツ、という音を鳴らしながら拳銃の安全装置を取り外す。そして指はトリガーへ。少し力を込めるだけで、海斗という人間の魂は天に召されることになるだろう。アーメン。

「待て待て、話せば分かる。何が望みだ」

「オレだってこんなことは出来るだけしたくないんだがよ。頼むから麗華のボディーガードになってくれねえか？　答えは『Yes』か『はい』だ」

「人に頼む人間の態度とは思えないな。どちらかといえは脅迫か？」

「そうとも言う」

海斗がゆっくりとこちら側を振り向く。

別に『Freeze! 動くと撃つぜ?』なんて言ったつもりはないので、特に動かれようが問題ない。
問題はない…のだが……。

「おい、てめえどこ見てやがる」

「麗華もかなり小さいとは思っていたが……」

一呼吸置いて、海斗は同情するような視線を向けてきた。

オレに　　ではない。

オレの、胸に。

「お前……本当に女なのか?」

ガァン！ガァン！ガァン！

「うおっ！？」

立て続けに三発、海斗の額に目掛けてトリガーを引く。
海斗は咄嗟に身をかがめて、銃弾の直線上から回避する。

「屋敷の中で本当に銃ぶつ放すなんて、どんな躰されてんだこのクソメイドは！」

「はっはっは。小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？」

「冗談じゃ、ねえぞ………！」

食堂の中を必死で逃げ回る海斗。笑いながら追いかけて銃を乱射するオレ。

そんな風景を見た麗華は青筋を立ててこめかみを押さた。

「今年に入つて、これで屋敷の修理が三十二件目ね……」

苦々しく呟いた麗華の言葉は、暴れまわるオレたちの耳には届かなかった。

結局、途中で仲介に入つた佐竹によつてオレはその場から連行された。

そして自室で謹慎。まったく暇な時間だった。

後から聞いた話によると、海斗は自分からまんまと墓穴を掘つて、麗華のボディガードになることが決定したらしい。

ふん、いい気味だ。先ほどの胸の件については、後日とことん礼をしてもらふことにしよう。

「ふあゝあ。もう寝るか」

外はもう真つ暗だ。恐らく使用人たちも仕事を止め、自宅通いの者は帰路についていることだろう。

オレやツキを含めた使用人の大部分は住み込みで働いているため、一人ずつ個室が与えられている。

ちなみにオレの部屋はツキの部屋の隣。隣から夜な夜な変な喘ぎ声が聞こえる……と思つていた時期がオレにもありました。

ツキはこの屋敷の誰よりも遅くまで起きていて、更に誰よりも早く目を覚ます。

ツキが就寝する頃にはオレはとつくに夢の中でケンドー 林と殴り合いの喧嘩をしている。

「おっと、その前に……」

いつもの日課である、そーちゃんへのメールを忘れていた。

そーちゃんとはオレのメール友達だ。イケイケの女子高生風に言えばメル友。なんだかナウい感じがするな。

毎日、こうやって今日あったことを面白おかしくそーちゃんに報告している。

そーちゃんは昼間は仕事で忙しいので、こうやって夜にメールをしているわけだ。

「今日は色々あったからな」

カチカチカチツ、と使い慣れた携帯を操作し、メールの文章を作成する。

宛先：そーちゃん

件名：糞蛆虫野郎が屋敷にきました。

本文：

我らメイドの憧れの主人である麗華お嬢様が、本日ビチクソ蛆虫をボディーガードとして連れてきてくれやりました。

あるうことが青色ゾウリムシ野郎は、私の胸をガン見して、その上でふざけたことを抜かしやりました。

今日は銃の手入れが悪かったので害虫駆除にまでは至りませんでし

だが、いつか絶対にあの虫の体液を使って書道家としての一步を踏み出したい思っています。
それではお体に気を付けて。

ミス・ブロッサムより

「これでよし、と」

メールを送信したことを確認して、携帯をベッドの上に放り投げる。それに続いてオレも体を投げ出すようにして、ベッドにダイブ。

「あゝあゝ、この時のために生きているううゝ！」

オヤジ臭い声を出しながら布団に顔を埋める。

この感触、この匂い。オレを睡眠と言う名の快樂へ誘おうとして放さない。

今日一日頑張ってきた苦勞が、布団の中へと吸収されていく感覚。

「最高だ……オレは布団と結婚する」

愛しの彼（布団）と抱き合いながら、オレの意識は闇へと落ちて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3472ba/>

オレはメイドだ

2012年1月10日01時25分発行